

第一章 石井長官のプロフィール

この世界にある『日本国』は、妖魔たちが密かに、跋扈【ばっこ】している・・・
・・・人を襲い、犯し、喰う妖魔たちの脅威【きょうい】から、秘かに国民を守る組織があった・・・その名は、『法務省特殊機動隊』。日本中から集められた孤児たちに、国家機密で戦闘訓練を施し、やがて戦士となった彼らは、一生をかけて妖魔退治に挑む宿命を持つ。
この組織を統率するのが、第97代目長官・石井 久。まだ、33歳の若さである。
無能長官を輩出し続けた過去を払しょくするため、彼は、就任直後から様々な構造改革を進めてきた。
LGBTの隊員たちに対しての『性別変更制度』。性暴力被害にあった隊員たちへの『緊急見舞金制度』大ケガをして再起不能になった隊員たちへの『障害人事異動制度』・・・ここに挙げた以外にも、石井長官の徹底した構造改革は、細部に及んだ。優秀過ぎるゆえ、色々と敵も多くいるが・・・
彼が長官に就任して三年・・・その間、東京都を中心に数多く暗躍していた妖魔たちが、散り散りになって退散した。それゆえ、あらゆる種族から『鬼長官』と恐れられ、魔界各地の妖魔たちからも、人間界のごく一部からも、ものすごく憎まれている人間の一人であった。
身長・180cm 体重・推定で75kg 生まれつき茶色い髪。片親がアメリカ人らしく、色白で彫りが深い顔立ちをしている。
ヒラ隊員時代からの武闘派で、18歳での初陣のときから、ケガが絶えなかった。おかげで、服を脱げばいたるところに古傷が・・・隊員としての番号は、『E-7』。
ワイロとエコひいきが大嫌いな彼は、どちらかと言えば、融通【ゆうずう】が利かない。だからこそ・・・彼は、恐れられつつも慕われていた。

そんな彼のハートを射止めたのは、前代未聞のドジっ子隊員・山田由真であった！！

第二章 由真ちゃん慰安婦誕生！！

ときは、20XX年 5月7日 ところは、東京都某所の地下にある、法務省特殊機動隊・首都ブロック・・・ある女性隊員の『慰安婦就任式』が行われた。
身長160cm 体重50kg前後 背中に届く黒髪を、一つにまとめて三つ編みしている。ナチュラルメイクの童顔隊員。見た目は昭和の女子高校生。だが、実年齢は25歳。
愛くるしい顔を紅潮させながら、目の前のイケメンを、凝視していた。
「辞令・山田由真。本日をもって、たった一人の『特別慰安部隊』所属とする。20XX年5月7日。人事部長代理、石井 久・・・」
爽やかなスーツを着たこの男性・・・実は、人事部長よりはるかに偉い、石井長官その人である。
身長差20cmもある、でこぼこカップル(?)を、人事部全員が、固唾をのんで見守っていた。誰もが、無駄に緊張している。
「・・・この辞令は、長官である私から、特別に下される人事である。よって、今まで以上に任務に励むように・・・」
すっ・・・と、辞令の紙が、童顔隊員に手渡された。
「は・・・はいっ！！了解いたしました！！」
嬉しそうなソプラノの声。ぼつぼつ始まる適当な拍手。そして、照れくさそうな長官の声・・・一部の隊員たちからの、ジェラシーストームの集中攻撃を背中に受けながらも、新人慰安婦は、心の中で冷や汗を流した。
・・・慰安婦とは、一部の男性相手に『性的サービス』を提供する、屈辱的役割を受け持つ女性たちを指す言葉である・・・しかし、由真の場合は違っていた。
と、言うのは・・・石井長官と山田由真、実は相思相愛のおバカップルなのだ。
先月の終わりごろ、誤字脱字の『移動願ひ』を書いた由真を、無理やり引き留めた挙句に押し倒

したのが、このカタブツ長官であった。

「愛している…由真…行かないで…」

告白と共に、長年片想いしていた年下秘書を、彼は、強引に押し倒し男女関係を持ってしまった…これも立派過ぎる『強制性交』。相手が彼女でなかったら、翌日から『長官、セクハラ、アウトー！！』であっただろう。

「…責任をとりたい…」

6年続いたプラトニックな関係に終止符を打ち、腹心の橋本次官をはじめとする、多くの部下たちの反対を押し切って、強引に人事異動を決めた鬼長官。おかげで、多くの隊員たちが(男女を問わずに)泣きぬれて蟹と戯れたとか？

特に…自称『石井長官原理主義者・元祖』の、橋本次官(36歳)が、泣く・喚く・暴れまくるの、職務放棄スーパートリプルアクセルで、機動隊上層部は混乱した。

嫉妬にオリンピック&パラリンピックがあるならば、橋本は、余裕で連続金メダルを取りまくる、ウルトラアスリートであろう。そして、怖い意味で記録に残される…と思う。

隠れゲイの橋本次官にとって、年下イケメンの石井長官は『神をも超える信仰の対象』なのだ。そこいらのエセ信者の100億倍、厄介だ。

さて、話を戻そう…

「慰安婦とは…性的にも任務的にも、言葉でさえも、悪いイメージが付きまとう…しかし、この役目は、君にしかできないから…その…宜しく頼む…」

ペコリ…石井長官が、素直に頭を下げた。

「…あ…ありがとうございます…身に余る光栄です…」

童顔由真も、深々と頭を下げた。

祝福の拍手に混じって、あちこちから漂う、ジェラシーストーム…特に、人事部の掃除道具が入っているロッカーから、じっとりしているベテラン隊員・橋本冬彦。

白いハンカチをくわえ、恨めしそうに新人慰安婦を睨む…ポッコリお腹を地味目のスーツに隠して、泣きぬれる姿が哀れと言うか…怖いと言うか…

(…はう…橋本次官の痛い視線が…背中に刺さりまくりますう…)

恋敵の呪い(?)を受けつつも、健気な由真は笑顔で耐える。

(橋本次官が、私と同じに石井さまに恋しているの…知っています…)

鳥肌立つくらい怖いけど、嬉しい人事を前に、今は逃げ出すわけにはいかないのだ。彼女もまた、『石井長官原理主義者・本家』を、自負している。

(だけど…もう石井さまから離れません…)

日本屈指の非力な女性隊員は、決意を新たに、辞令を抱きしめた。

(…愛しています…心から…)

つぶらな瞳に、じんわりと涙が光った。

第三章 貧弱女子のシンデレラヒストリー

二人は、今から16年前に出会った。

元は、全国各地から集められた、戸籍のない子供たちだった。

極秘で集合した彼ら・彼女らは、6歳から18歳になるまで、日本国某所に存在する秘密施設で、養育されるのだ。未来の『法務省特殊機動隊隊員』として…

ちなみに、特殊機動隊の創立記念日にあたる4月20日は、全隊員の誕生日と決められている…その後、18歳になった彼らは、日本各地の機動隊基地に配属されて、死ぬ日まで戦い続ける定めであった…

ごくまれに、55歳まで生存できた隊員のみが、晴れて『定年退職』を迎えるシステムであるが…それは、隕石が当たるより低い確率であった。

では…お話を進めよう…

特殊機動隊幼年部でのとある日…読み聞かせ絵本『大江山の鬼退治』をわきに抱えて、おかつ

ば頭のN-17号(のちの山田由真)は、ロクに前も見ずに、廊下をとぼとぼ歩いていた。当時9歳…

個性など必要とされていない組織において、集められた子供たちは名前ではなく『隊員番号』をつけられていた。

年齢順にAからZのアルファベットで、組みわけされる。そして組に来た順に、1～36の番号が与えられる。彼女の場合は、所属している組がNで、やって来たのが17番目なので、『N-17号』と呼ばれている。

ちなみに…組みわけされた36人の子供たちは、さらに『1班』『2班』にわかれて、毎日競い合っていた…ある意味、スパルタ教育！！

あれ…またお話がそれちゃった…それでは、続きをどうぞ…

「おらおらおらおらおら～～～！！そのドチビ、どきやがれ～～～！！！」

疾風のごとく現れた上級生が、食堂近くのN-17号に体当たりしてきた。

ドシンッ！！

成績が悪くて、もともとのろまなN-17号、ぶつかったショックで呆然自失…

「あ～、悪いなあ…だからどけと言ったのに…」

ぶつかってきた背の高い上級生(黒髪のイケメン)は、悪びれもせずに、走り去った。

「…痛いよお…」

おいてけぼりのN-17号は、転んで、本を落として、今更のように泣きべそをかく…

「君、大丈夫かい？」

そこへ、別の上級生が近づいた。

「????？」

見上げると、そこに茶色い髪をした、別のイケメンが立っていた。

「おーい、E-15号！！後輩にケガさせるな！！バカ！！」

誰かの背に向かって、怒鳴りつけた。どことなくエキゾチックな横顔に、つい、見惚れてしまう…

「あ…ありがとうございます…」

ほんのり頬が赤くなった。

「ケガは、ない？」

「はい…」

「立てるかい？」

見知らぬ上級生の手を借りて、小さいN-17号は、よろよろと立ち上がった。

「…どうも…ありがとうございます…」

「いいよ、礼なんて…」

優しく微笑みかけると、彼は落ちていた絵本を取り、小さい手に渡した。

「あとで、あのバカを叱っておくよ。番号は？」

「…N-17号…」

多少照れながら、何とか答えた。

「ふうん…俺はE-7号…班は1班だけど、同じ7番同士だね？」

当時のE組の年齢は、17歳…最上級生の彼とは、8歳離れている。

「はい…嬉しいです…これで班が同じなら…良かったのに…」

「そうだね…」

二人は、ほぼ同時に笑った。

(E-7号…素敵なお方…)

少女の胸は、ときめいた。

「じゃ、N-17号…気を付けてね…」

「はい…」

さっそうと走り去るE-7号の大きな背中を、熱い視線で見送った…

…ごくわずかなふれあいだったが、これが、N-17号の初恋であった。

あれから数年…17歳になったN-17号は、正隊員昇格試験に落ちて、18歳なった後も、幼年

部から出られなかった。ちなみに、最終試験に落ちたのは、後にも先にもN-17号ただ一人…明治維新と同時に始まった、特殊機動隊の長い歴史の中で、初めての…そして、多分最後の…レアケースであろう。

「まあ、いいか…お前じゃ妖魔とは戦えない…」

これまたレアケースで、55歳の定年退職を迎えた加藤教官(♂)に保護されて、元気に幼年部の雑用係を務めた。

しかし…19回目の創立記念日を目前に、ドジでとんまな彼女に、魔の手が迫った…

「殺処分…」

あろうことか、当時の機動隊長官・佐喜洋介【さきようすけ】が、容姿だけは可愛い彼女に目をつけた。そして邪魔する加藤教官たちを退け、恐怖の『殺処分』命令を下した。

最低最悪のドスケベ変態極悪非道な佐喜長官は、殺処分の名目で、まだ処女のN-17号に、思う存分性暴力の限りを尽くし、挙句に首を絞めて殺害するつもりでいるのだ。

「俺さまはなあ…女の首を締めながら犯しまくるのが好きなのだ…ぐふふ…」

…史上最凶のブサイク長官は、そういう趣味の人であった。

「このままではヤバイ…なんとかしなければ…」

N-17号を救うために、加藤教官は、派閥でも有名な『アンチ佐喜長官派』のルーキー(新人)、石井次官を呼び出した。

もうすぐ27歳になる彼こそが、『初恋のE-7号』であり、のちの97代目長官である。

事情を聴いた石井は、必死で佐喜長官&子飼いの次官たちを、説得した。結果…ガマガエルに激似のブサイク変態長官・佐喜は、ムツとした顔で答えた。

「…そこまで言い張るなら、お前がこのバカ女の面倒を見ろ…」

こうして、N-17号は命拾いしただけでなく、無試験で石井次官の雑用係に抜擢された。これもまた、レアケースである。

「…お前は、今から『山田由真』と名乗るがいい…」

ぶっきらぼうに命名されたN-17号。彼女はその後、法務省特殊機動隊北海道ブロックのトップを務める石井とともに、3年間頑張った。さらに、長官に抜擢された石井に連れられて、花の都・大東京へ…そこでも、3年近く頑張った。

…完璧な石井と、ドジなままの由真…二人の間に恋の花が咲くのは、もう少し先のお話である。

第四章 やせ我慢・7号の恋

自称・戦闘マシーン7号こと、石井次官は、秘かに悩んでいた。

肩書こそ秘書だが、実際は雑用係の山田由真。彼女の、ピュアをはるかに乗り越えた、『底抜けのお人好し』である部分に、心惹かれていたのだ…

彼女と出会ってから半年後…世にも懦弱で可愛らしい雑用係に、真剣に恋している自分を自覚した。

由真は、他人の悪口を言わないし、人前でもそうでなくても、優しい態度が変わることはなかった。誰にも親切で、お世辞も満足に言えないところに、マジ惚れした。

と、同時に…世間一般の小学生よりはるかに頼りない彼女が、心配過ぎて仕方がない。

なにしろ、大都市の札幌で2~3秒目を離れたら、速攻でマンホールに落ちかねないほどの、無力なオッチョコチョイである。子供妖魔も退治できない、日本屈指の貧弱さに、戦闘バカ石井は、ときどき泣きたくなった。

女性の先輩各位に意地悪されても、仕返しできないおバカさん…を、いつも目で追いかけていた。性的なサービスを提供するお姉さんたちには、平気で出来るセクハラが、平気で言える下ネタが、彼女相手だと、まったく出来ない。ぜんぜん言えない。

「…無様だ…ヒラ隊員のときから、戦闘マシンと恐れられたこの俺が…」

人生二度目の恋に、戸惑う彼…だが、失恋と言う悲しい花をつける前に小さな芽を全部摘み取って、やせ我慢のまま恋を終わらせるつもりでいた。嫌われたくなかったのだ。

やせ我慢は、北海道で3年間。長官になってさらに3年近く続いた。

それからしばらくした4月27日未明…仮眠室で二人きりと言うシチュエーションで、我慢の堤防が決壊した。

きっかけは、由真が泣く泣く書いた『移動願い』

あろうことか、彼女は自分から、地方都市の閉鎖的なブロックで、一生、雑用係を務める気でいたのだ。

焦った石井は、無理やり由真に口づけした…

「…行かないで…」

長いこと隠していた胸の内をさらけ出して、そのまま、押し倒してしまった。

「由真…由真…可愛い…」

翌朝、相思相愛だと気が付いた二人は、抱き合いながら口づけした。

第X章 変態・橋本次官の独白

はああああああい、皆さま、いきなりですがここから『三人称』から『一人称』に変わりますよ！！この章は、わたくし、橋本冬彦が担当いたしますでございますよ！！

良い子の皆さん&小説家の卵の皆さん、決して、こういう書き方はマネしないでくださいね！！バカにされてどの小説新人賞にも落選しますからね！！確実ですよ！！

その前に…やーい、やーい、宇宙傭兵軍団・カレリア・スシ旅団の司祭長！！

おめーが信仰する『カレヴァ・レミンカイネン旅団長』が、どれだけ素晴らしいイケメンか知らないけれど、わたくしの信仰は決して揺らぎはしませんからね！！えへん！！

さて…わたくしが敬愛&信仰しまくる石井さま。出会いは、彼が18歳で、まだ東京の首都ブロックにいた頃…ホモセクハラに苦しむ彼を助けた瞬間に、この美しい×30億の青年に、一目惚れしてしまいました！！ああ、何という運命！！

それまでのわたくしの視界は、『ブラック&グレー』でありました。それが、運命の一目惚れからわずか2秒で、色とりどりの鮮やかな世界に、激変していたのです！！

素晴らしい！！(フリーザーさまか、お前は！？Byえみし・謎のツッコミ)

あれから、すぐに石井さまは『出世街道・首都ブロック』から、『左遷の流刑地・九州ブロック』に、人事異動させられました。

と、ほぼ同時に、佐々木長官(第94代長官)が、わざわざ国防軍から人工衛星をまるっとレンタルして、わたくしに極秘命令を下しました。

「人工衛星を使う許可を得た…これで、貴様は九州ブロックを、東京から見張るのだ…」

聞けば、九州ブロックには奥田つばさ次官がいて、かの佐々木長官とは犬猿の仲だとか。そこで、

気の強い九州ブロックの面々に知られないよう、はるか宇宙から見張れと…

渡りに船とはこのことか？即座に、命令を引き受けました！！

それは、夢のような日々…東京の狭いモニタールームから、敵地・九州ブロックを、正々堂々と人工衛星で覗き見！！ストーカーとしても変態としても、たぐいまれなる、良い環境！！そこで、日々美しく成長していく、石井さまのお姿を拝見しまくりでした！！

その後、佐々木長官がくたばると、佐喜とか言う奴が95代長官に…まあ…

こいつにこき使われながらも、秘かに石井さまのストーキングは続行しましたけどね。

それからまた、佐喜が異次元の彼方へ消え去ると、久能と言う奴が、96代長官に。

こいつは、わたくしから人工衛星を操作するモニタールームを取り上げて、自身の仕事を、全部わたくしに押し付けたのです！！その当時の石井さまは、次官に出世して北海道に。

29歳になられた石井さまは、それはそれはお美しゅうございました。

で、くそ長官・久能は、就任後わずか一年で、謎の殉職をしていただきました！！

その後、弱冠30歳の若さで、石井さまが長官に就任されました！！マンセー！！

・・・新長官誕生と共に、わたくしの目の前に、『石井長官原理主義者・本家』である、山田由真なるライバルが、現れました。このアマが、ドジでくずでアホで・・・肩書が秘書なくせに、大事な書類をシュレッターにかけたり、3日に一度はコーヒーカップを割ったり、最新パソコンをフリーズさせたり・・・ああああ、目に余るドジっぶり！！顔面以外に取り柄なし！！子供妖魔どころか、ゴキブリさえ退治できない・・・ええい、この無能の役立たず！！わたくしが直属の上司だったら、このアマは即座にSHATHUGAIですよ！！OSHIOKIですよ！！

・・・これでも殺意がワキワキするほど頭にくるのに・・・なんと、このど貧乳童顔メスチワワが、石井さまのご指名で、たった一人の慰安部隊に移動して、挙句『石井さま専属の慰安婦』に抜擢されるなんて・・・あああああ、天よ泣け、地よ暴れよ、ついでに海も荒れちまえ！！この無念、この現実、失恋だとは認めません！！あああああああああ、スーカー生活15年目で、今が一番の屈辱&試練&大氷河時代到来です！！

しかし・・・チワワのくせしてさすが恋敵。わたくしに匹敵するほどの熱い信仰心を持ち、いじめにも負けず意地悪にも負けずに、原理主義者本家として、正々堂々と振る舞うあたり・・・原理主義者元祖として、『敵ながらあっぱれ！！』と、褒めて差し上げましょう！！

だが・・・わたくしは負けません！！打倒、メスチワワ！！今日も元気に、五寸釘！！

第5章 ここから始まるストーリー・・・

「生きていて良かった・・・」

世界屈指の貧弱慰安婦になれた由真は、鏡に映る自分の顔を、しげしげと眺めた。

生まれつきの貧弱者で、子供のときから損ばかりしてきた。しかし、9歳のときに心の王子さまと出会い、18歳の終わりごろに再会して、25歳になってすぐに、恋人兼慰安婦になれた・・・幸せ過ぎて、涙が止まらない。

間もなく、石井長官が迎えに来る。新宿歌舞伎町のマンションに引っ越して、愛しい彼と寝食を共にするのだ。

今までは、東京某所の地下の女子寮で、狭い一人部屋にいた。

狭い部屋を埋め尽くすのは、チャンリオの看板キャラクター『スマイル・キャンディー』のグッズたち・・・ぬいぐるみ・食器・ポスター・カレンダー・置時計・普段着・お風呂セットまで、とことん押しキャラにこだわっている。傍から見れば、お金の無駄遣いだ、本人にとっては、どれもかけがえのないお宝である。

得に・・・手の平に転がしているマスコットは、初めてもらったキャンディーグッズ。ピンク色があせた、小さいキーホルダーであった。

実は、石井次官がたまたま立ち寄ったコンビニで、たまたま買ったお茶のペットボトルに、たまたまついてきたおまけであった。

「・・・趣味じゃないから・・・」

はにかみながら手渡したキーホルダー・・・これがきっかけで、由真はキャンディーグッズの可愛らしさにのめり込み、気が付けば機動隊唯一の『キャンディーマニア』となった。

ピンク・白・水色は、由真の大好きな色である。反対に、黒と灰色は『懲罰房』の色だから、大嫌い・・・皮肉にも、恋のライバル橋本次官は、黒と灰色がお気に入りである。

「幼年部のときは、毎日泣いていたけれど・・・今夜から、毎晩笑顔で過ごせるかも？」

うら若き乙女は、胸をドキドキさせながら、腕時計を見た。

・・・次の瞬間、部屋のドアがノックされて、長官がひょっこり顔を出した。

「由真・・・迎えに来たぞ・・・」

「えっ・・・でも、まだ荷造りが・・・」

「他の部下たちに任せるさ・・・さあ、行こうか？」

すっと、優しい腕を差し出す長官・・・どぎまぎしながら立ち上がり、そっと手を掴んだ。

ポポポーン…由真の頭の中で、100万発の花火が弾けた。
「こ…これからもよろしく…です…」
身に余る光栄の連続は、しばらくの間、続くのであった。

第一話 了。